



●高知県 大川村 2007

カラーでもモノクロでも一貫して撮影するテーマは同じです。それが視覚的にはっきりと表れていようと無かろうと、そのやわらかい地質とそれをシェープしていく雨、つまり水が私のひとつのテーマになっています。そこに繰り返し展開される土木工事は、アートシーンにおける規模の大きな造形行為のようにも見えます。(柴田敏雄)

ランドスケープ — 柴田敏雄展

2008年12月13日(土)～2009年2月8日(日)

東京都写真美術館 2F展示室

主催：財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／読売新聞東京本社／美術館連絡協議会
助成：芸術文化振興基金
協賛：ニコン／ニコンイメージングジャパン／ライオン／清水建設／大日本印刷
協力：双ギャラリー／ツァイト・フォト・サロン／フォトグラファーズ・ラボラトリー／
イマジン・アートプランニング

「ランドスケープー柴田敏雄展」開催にあたって

東京都写真美術館では2007年から国際的に活躍する中堅作家を、積極的に紹介していく機会を設けました。この展覧会はその第2回目として、柴田敏雄をご紹介します。

柴田敏雄（しばたとしお 1949年生まれ）は東京芸術大学で油絵や版画を学んでいましたが、ベルギー留学中に本格的に写真制作を始めました。帰国後の1980年代後半に、ダムやコンクリートに覆われた造成地など人工的に変容された風景を捉えたモノクロ写真で注目され、近年ではカラー作品も発表しています。静謐で抑制された写真は紛れもない私たちが生きている現実を表しています。

1992年には木村伊兵衛写真賞を受賞し、国内だけではなく、海外の多くの美術館にも作品が収蔵されています。国際的に評価が高いにもかかわらず、いままで国内の美術館においてその活動を辿る展覧会がありませんでした。今回は80年代前半に撮影された初期の作品をはじめ、東京都写真美術館と作家が収蔵している作品に新作も加えた約70点の作品で現時点での柴田の活動を振り返ります。

本展のみどころ

① “究極のモダンランドスケープ”を堪能する

柴田敏雄の作品を一目見たとき、まずはその不思議さと、圧倒的な美しさに惹かれることでしょう。もはや現代において、手つかずの自然だけが風景美とはいえません。人気のない山奥に突如現れるダムや、普段なにげなく通っている道路など、自然の中に人間が無意識に作り上げた景色は、柴田独特のフィルターを通して“現代の風景美”として表現されています。私たちの風景は、これほどまでに現代的な美しさをそなえていることを、作品は雄弁に語っているのです。

②モダンアートと柴田写真

柴田の写真観は独特といえます。それは自身が写真以外のジャンルから美術をスタートさせた背景があるからでしょう。油絵を勉強し、ジャスパー・ジョーンズやロバート・ラウシェンバーグ、アンディ・ウォーホールなどのポップアートに魅了され、当時の日本の写真には嫌悪感さえおぼえていた学生時代。柴田の写真の根底には、豊富なモダンアートの経験が流れているのです。また外へ出かけて作品を制作する開放感も、柴田が写真に魅力を感じる大きな理由のひとつです。



●埼玉県 秩父市 2006

③大型プリント作品の美しさを実感する

柴田は4×5、^{シノゴ}8×10^{エイトバイテン}などの大型カメラで作品を制作します。そして徹底的にプリントの美しさ、緻密さにこだわります。それは1980年も近いパリの画廊でアンセル・アダムスなどのグループf64やマイロウィッツの美しいプリント作品に出会ったこと、そしてなにより、写真の展覧会が美術の画廊で行われていたということ自体が、自身のメディアとして決めるきっかけとなったからです。この展覧会では、100cm×125cmの印画紙にこだわった大型プリントを多数展示。柴田ならではの美しいプリントの世界をお楽しみください。

④代表作から最近のカラー作品まで約70点を展示、国内初の美術館個展！

柴田の作品は、ニューヨーク近代美術館やヴィクトリア&アルバート美術館など世界の名だたる美術館に収蔵されています。国内でもその作品を発表する個展は開催されてきましたが、美術館での個展は今回がはじめてです。美術館の広い空間に、大型作品を中心に約70点がどのように展示されるのか。その迫力にどうぞご期待ください。

⑤初！柴田氏自身による音声ガイド

本展では初の試みとして、作家自身の文章による音声ガイドをご用意しています。メディアの表舞台に出ることの少ない柴田氏ですが、自身の経験談や作品の考え方がふんだんに盛り込まれた内容は、通常の音声ガイドとはちがひ、まるで詩をきいているかのような心地よさです。柴田氏の人となりを感じてみてください。

柴田敏雄略歴

- 1949 東京に生まれる
1968 東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻入学
1974 同大学院美術研究科絵画専門課程油画専攻（修士課程）終了
1975 ベルギー文部省より奨学金をうける
同ゲント市、王立アカデミー写真科入学、写真を始める
1979 帰国
1988 筑波大学専任講師（1991 年まで）
1987 東京総合写真専門学校講師（2007 年まで）
1992 第 17 回木村伊兵衛賞受賞

出品作品と展示構成

柴田氏の作品は、カラーでもモノクロでも撮影するテーマは一貫しています。この展覧会では、1980 年代～現在までに発表された作品を、作品のシリーズではなく、「夜景」「モノクロ」「カラー」という 3 つのタイプに分けてご紹介します。

<展示構成>

①夜景

夜によって余分なものが消え光に浮かびあがった世界。柴田作品ならではのトーンの美しさが堪能できる作品群です。（10 点予定）

②モノクロ

柴田自身が理想の写真の質感に一番近い、と言うモノクロの大型写真を中心に展示します。（40 点予定）

③カラー

モノクロには向いていないからという理由で落としてきた風景に気づき、3 年ほど前から始めたカラー作品の制作。100cm×125cm の特大プリント 4 点を含めた最近作をご紹介します。（24 点予定）

<総出品作品数>

74 点（予定）



●東京都 奥多摩町 2006

図録のご案内

展覧会の開催に合わせ、出品作品を掲載した展覧会図録を発行します。

『ランドスケープ 柴田敏雄』

企画監修：東京都写真美術館

発行：旅行読売出版社

B4 判・並装製・ジャケット巻

総 84 ページ、掲載図版 70 点（予定）

予価 2,800 円（税込み）

※当館ミュージアムショップ ナディッフバイテン（電話：03-3280-7279）および全国書店にて販売します



●山梨県 甲府市 2007

会場では柴田氏自身の文章とナレーションによる音声ガイドをご用意しています。ここではその一部から、作品の背景やエピソードをご紹介します。



●高知県 大川村 2007



神奈川県 愛甲郡清川村宮ヶ瀬 1983



●神奈川県 鮎沢パーキングエリア 1986

早明浦ダムに流れ込む吉野川にかかっている橋です。1月、冬の陽の中、モヤがかかっていて赤い橋が浮かび上がっていました。もう少しで山陰に日が落ちてしまいそうでした。それで急いでカメラをセッティングし撮影しました。あまりあれこれと構図を探ることはせず、シャッターを切りました。この作品も撮影時にはさほど気になるイメージではありませんでしたが、プリントしてみると背景の山がとてもフラットで書割のような感じです。そこから赤い橋が突き出ているように見えて視覚的にとても不思議な作品になりました。

ベルギーから帰ってきてしばらく写真が撮れませんでした。ベルギーで写真を始め、日本に帰ったら写真を撮ろうと思っていましたが、いざ向き合うと目の前にある現実があまりにも混沌と感じられたからです。そこで夜の写真を撮ろうと思いつきました。余分なものが消え光に浮かび上がるものだけがある世界に惹かれ数多く撮っていました。この写真は1983年帰国後3年目くらいに撮影したのですが、この対象と偶然目が会い撮影したものです。その後の自分の作品の元になる最初の写真です。無機質なコンクリートが生き物のようにうずくまり、こちらを見据えているような、まるで「撮らないの？」とささやいているようでした。写真を撮始めて以来、ずっと4X5のカメラを使ってきました。大型の機材なのでいつも車で移動します。このスタイルは今でも変わりません。ときどき思うのですが、自分にとって写す対象を探して車で移動している時間はただの無駄な時間ではなくて、たとえば絵筆をとって絵を描いたり、ものを作ったりしているようなこと(空間)と同じだと思います。

1983年ごろから昼間の写真も撮るようになって興味はそちらのほうに移っていました。夜の写真は1981年から撮り始めていましたが、夜の写真の集大成としてなにかまとまった形にしたいと考えていました。広重の五十三次になぞらえて、東名高速道路のPAとSAとICをすべて撮ってみよう、とそこは考えていました(未完)。これはPAに止まっているトラックの荷台。パーキングエリアの強い照明があたって積荷が浮かび上がっている様がまるで演出されているように感じられました。じっと見つめると単純な照明によって浮かび上がる表面の質感と影とがまるで舞台装置のように見えてきます。



●Grand Coulee Dam, Douglas County, WA 1996

1993年頃シカゴ現代美術館からコミッションワークの話をしていただきました。資金、そして時間をいただき、自由に撮影できる夢のようなプロジェクトでした。しかし実際撮影するとなるとさまざまな現実がぶつかりました。地形の違い、距離感、気候、とくに湿度など微妙な感覚の違いから今までの撮影のやり方そのままでは通用しないと感じました。地平線のない日本と広いアメリカの風景の違い。そんななかで撮り方をいろいろと工夫し、ようやく得た作品です。これはダムの上から下を覗いた眺めですが、雲のようにも見える水面をたたく水の泡には、何か私が知っているアメリカの景観とは違う空間を感じました。私はこの作品によって、なにかもうひとつ新しい視点を私自身に得たような気がしています。



●青森県 平川市 2006

畑や農業の風景などは、日本で写真を撮り始めた80年代には数多く撮っていましたが、今までにあまり発表してきませんでした。おそらく田園風景は自分にとっては情緒的すぎると感じていたからでしょう。田んぼや畑などは自然の風景とみなされがちですが、見方を変えれば、人間が自然を利用するために手を入れた原始的なもの、土木の根源ともいえると思います。もちろん撮影時にはそういうことはあまり考えていません。



●栃木県 日光市 2007

数日間福島県の会津地方を撮影したあと、日光を通り東京に戻りました。もう日が暮れそうで今回の撮影も終わりだな、と思っているときに大きな砂防ダムが目につきました。不思議なのですが、もう夕方だし、そろそろあがりになり、あとは帰るだけというときに、写したい対象に出会うことがよくあります。

強く欲しがっているときにはなかなか手に入らず、それは、ふと力の抜けたときに思わず向こうからやって来るようです。

この場所では撮影のスペースがたくさんあって、いろいろな撮り方が可能でした。このときはできるだけユーモラスな感じに撮りたいと工夫しました。



●東京都 奥多摩町 2006

良い写真を撮すには写真家の立ち位置、ポジションが重要です。写したい対象に出会っても適切な距離、アングルが必ずしもあるとは限りません。そんなときできることは、あっさりあきらめるかレンズの長さなどをかえてチャレンジすることです。この作品は取り直したものです。同じ場所を再び撮影するということは私には珍しいのですが、このときはやはりもう一度ちゃんと撮影したいと思ったのです。



岩手県 西和賀町 2007

写真はとても直接的な表現です。アートは「人間」というものを表現するものだと思います。しかし、人間を表現するのに人そのものを写すというのはあまりにも具体的すぎるのではないかと、思い、できるだけ婉曲的な表現を追求してきました。私は人間の機知に興味があります。具体的に人が画面上に写るのを避け、またあまり人がいないような場所で撮影をしてきました。ここに写っているダムは改修中で、働いている人が写っています。モノクロの作品を写しているときだったらここは撮らないか、人がいなくなるのを待っていたかもしれません。

一枚前の写真で人物が写っていることに気が付いてから、自分の作品に人が入っていても入ってなくても、どちらでも自分の写真は成立するという意識に変わってきたのかもしれない。

関連イベント

■新春アーティストトーク

2009年1月2日(金)、3日(土) 14:00~

■担当学芸員によるフロアレクチャー

第1、第3、第5金曜日 14:00~

※本展覧会の半券(当日消印)をお持ちの上、展覧会場入り口にお集まりください

■講演会(会場:1階創作室)

第1回:2008年12月23日(火・祝) 14:00~16:00

<出演>飯沢耕太郎(写真評論家)×柴田敏雄

第2回:2009年2月1日(日) 14:00~16:00

<出演>光田由里(渋谷区立松濤美術館)×柴田敏雄

※当日10:00より本展覧会半券をお持ちの方に1階受付にて整理券を配布します

開催概要

- 展覧会名 **ランドスケープ – 柴田敏雄展**

- 会期 2008年12月13日(土)～2009年2月8日(日)

- 会場 東京都写真美術館 2階展示室
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099
JR恵比寿駅東口より徒歩7分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩10分

- 開館時間 10:00～18:00 (木・金は20:00まで) 入館は閉館30分前まで

- 休館日 月曜日 (ただし月曜が祝日または振替休日の場合、その翌日)

- 観覧料 一般 700(560)円 学生 600(480)円 中高生・65歳以上 500(400)円
※()は20名以上の団体料金および東京都写真美術館友の会会員料金
※小学生以下、障害をお持ちの方とその介護者は無料
※第3水曜日に観覧する65歳以上は無料

- お問い合わせ先 東京都写真美術館事業企画課
＜展覧会担当＞電話 03-3280-0031
藤村 里美 s.fujimura@syabi.com
＜広報担当＞ 電話 03-3280-0034
久代 明子 a.kushiro@syabi.com、米田 智子 t.yoneda@syabi.com

<プレス用図版について>

このリリースに掲載されている、キャプションの前に●印のついた図版を、プレス掲載用にデータにてご用意しております。ご希望の方は、上記広報担当までお問い合わせください。

本展ではポストカードをはじめ展覧会オリジナルグッズを多数ご用意しています。詳細は上記広報担当までお問い合わせください。